

脱深刻化（Enternstung）という敗北の形

——ナチス政権下のムージルの観察から——

Die Enternstung als eine Mimikry der Niederlage :
aus Beobachtungen Musils unter dem
nationalsozialistischen Regime

早坂七緒

要 旨

1933年のナチス政権確立以降、ドイツ、オーストリアでは次々に議会制民主主義や言論の自由などが蹂躪されていった。大方の市民の対応は「脱深刻化」、すなわち大したことはないとする敗北的な態度だった。その下地を形成したのが第一次世界大戦以降、数度にわたり高揚と幻滅を体験した人びとの「魂の真空」であるが、さらにムージルも含めた作家や詩人たちが既成の概念や感性、ひいては旧来のモラルを疑問視する作品を発表して、ナチスの不条理な主張を説き伏せる言葉と理念の力を殺いだことでもあると思われる。ムージルは反ユダヤ主義を全否定していたが、政治については「態度表明しない」姿勢を貫いた。これは「精神」にのみ従い、党利党略などを離れて、単独者として判断するためであった。

キーワード

ローベルト・ムージル、ナチス、亡命文学、イロニー、アドルノ

ブレスラウ〔ポーランド南西部の都市。1945年までドイツ領〕の劇場監督バルナイ¹⁾は、(…) 5人の制服を着た男たちに住まいから車で拉致され、郊外の小さな森で降りるよう強制され散々に殴られた。〔ナチの〕当該地区指導部はこの事件を非難したが、犯人を探すことはしなかった。こうした例は何百とあった。以前であれば、このような事件

は血の報復の起因となっただろう。今日では一身上の (persönlich) 尊厳、一身上の自由うんぬんの問題すべては、もはや真剣な抵抗のきっかけにはならない。一般的な受け取り方は、「耳に響くほど深刻ではない」、である——つまり〈脱深刻化 (Enternstung)〉!。戦争においては果敢そのものであったかもしれない同じ個人 (Individuum) が、どうしようもなく臆病だというところに、一身上のもの (das Persönliche) の本質がある」(T 725)。

なぜ1930年代のドイツがナチスに席卷されたのか、教育を受け教養もあるはずのドイツの市民がなぜ阻止できなかったのか、繰り返し問われた謎に対する答えはおそらく膨大であろう。筆者にその樹海にも似た資料と論考に立ち入る能力はない²⁾。本稿は1938年8月までウィーンに留まったムージルの状況を見つめ、彼の観察し認識したものを追うものである。ムージルの人と作品の理解に資すれば目的は達せられる。

ムージルが日記に書きとめた1933年3月上旬の上記の事件、つまりユダヤ人の劇場監督へのナチスの暴行に対する大方の反応は、「耳に響くほど深刻ではない」つまり「結局それほど大したことはないさ」という捉え方であった。この〈脱深刻化 (Enternstung³⁾)〉の積み重ねが、水晶の夜からポーランド侵攻、バルバロッサ作戦、ドイツ壊滅に至るナチスの蛮行を許すことになる。

もっとも、この〈脱深刻化〉、「結局それほど大したことはないさ」という捉え方は、のんびり構えた傍観者の態度ではなかった。深刻な事態なのに、それを打開する可能性を封じられたために取らざるを得なかったもの、いわば敗者の合理化としてあった⁴⁾。

1933年2月27日の国会議事堂放火事件を受けて、デーブリーンは翌日に、続いてクラカウアー [Siegfried Kracauer 1889-1966]、カール・オトゥン

〔Karl Otten 1889-1963. ムージルの支援者。シーレの素描が残っている〕, クラウス・ピンクス〔Klaus Pinkus 1895-1978. ムージルの支援者〕等がドイツを脱出した。3月中旬にはヴィルマースドルフ(ベルリン西部の地区)の芸術家コロニーが襲われ、キシシュ〔Egon Erwin Kisch 1885-1948〕, ミューザーム〔Erich Mühsam 1878-1934〕, オシエツキー〔Carl von Ossietzky 1889-1938〕が拘束された⁵⁾(KC1123)。ユダヤ系の作家たちは、生命の危機が眼前に迫っていることを覚らざるを得なかった。

彼等に較べるとムージルは、それほど危機感をもたなかったようだ。1938年8月までドイツ、オーストリアに留まっていたのだから⁶⁾。国会議事堂放火事件の当日、ムージルはベルリンのペンション・シュテルンで執筆活動を行っていた⁷⁾。日記にそれに関連する記述がある。

「3日前に国会議事堂が炎上した。昨日は、KPD〔ドイツ共産党〕とSPD〔ドイツ社会民主党〕を根絶するための緊急命令が出された。新たな男たちは乱暴に手を下す。わたしが接している人たちのあいだには、まずは怒りの感情が広がった。真理や自由といったものの顔面に拳骨を浴びせられて、本能的に怒りを覚えたのだ。これが自由主義的な教育を受けてきた人たちの反応である。昨日、ラジオでゲーリング〔Hermann Göring 1893-1946 ヒトラーに次ぐナチ党最高指導者〕がああした措置を取った理由を、静かで穏やかな男らしい声で話すと、ヴィッテ夫人〔ペンション・シュテルンの持ち主〕の気持ちがさっそく揺らいだことが傍目にもわかった。《KPDが計画していたことが本当なら、何てひどいのでしょうか!》。この言葉の仮定の部分は縮小してゆく。新しくなることはそう悪いことではない、無意識に抑圧していたいくつかのものが解放されるのだという感情が、全体としては大きくなってゆく。口にこそしないが、断固として拒否するという印象を与える

のは女中⁸⁾たちだけである」(T 722f)。

コリーノによれば、ムージルは書き留めていないが、当時ひとりの女中が自殺した。ムージルはそれをおそらく新聞で知っただが、スイスに亡命してからもそれが忘れられなかった。事件から6年経っているのにムージルはイニャッツイオ・シローネ〔Ignazio Silone 1900-1978 イタリアの作家、政治家〕に、「ドイツ人の女中が国会議事堂炎上に心を痛めて自殺した」という記事を覚えているかどうか尋ねている。「この事件についてあれこれ考えたが、どうしても説明がつかなかった、とムージルは言った。国会議事堂と何らかのつながりのあった何千もの人たちは、誰も自殺などしなかった——それなのに、どうしてこの女中が？ 国会議事堂はこのあわれな女性にとって、いかなるシンボルであったというのか、いかなる神話であったというのか？」(T II 524f), (KC 1123)。

自在に意識操作して enternten (脱深刻化) できる、いわゆるインテリ層とちがって、Dienstmädchen (小間使い) たちは事態を正面から受けとめた、と考えることはたやすい。だからといって、いわゆる素朴な人びとがおしなべて「真理や自由といったものの顔面に拳骨を浴びせられて、本能的に怒りを覚えた」のかどうかは不明である。3月5日の(最後の)国会総選挙においてナチスは得票率43,9%であって、288議席を獲得して第一党になった。つまり1,695万票あまりがNSDAPに投じられたことになる⁹⁾。ここには何らかの風潮、趨勢が作用してもいたと推測せざるを得ない。

理性と道徳への揺さぶり

ヴァイマル共和国時代に人びとがどのように「自由主義的な教育を受けた」のか、それについての資料は手元にない。だがそれ以前に、ムージルによれば、ドイツ人やオーストリア人たちは2度の熱狂と2度の幻滅

を体験していた。1度目は第一次世界大戦開戦時の動員の際の熱狂である。「戦争は病気のように、いやそれに伴う熱のようにほくを襲った」(T 956)。1921年のエッセイ「理想の国民と現実の国民」には次のような一節がある。

何百万という人びと、それまでただ私利私欲のために、死への恐れを糊塗しつつ生きていただけの人びとが、突然歓呼して国民のための死に向かって突進したのは、あれは何でもなかったのだと思いたいのだろうか？ (…) たとえ何百万もの人びとが自らを、彼らの生活を、彼らの人生の目的を、彼らの身内を、彼らのヒロイズムのすべてを、ただの幻影 (Phantom) に捧げただけのことだったとしても、いったいそのあと、あっさり正気に戻り、立ち上がって、そそくさと立ち去ることができるものだろうか？ まるで酔いから覚めたように。すべては陶酔だった、精神病 (Psychose)、集団催眠、資本主義のペテンだった、いや民族主義の、ないし何やらのペテンだったとこじつけながら？ そんなことができるわけがない… (P 1060f)

多くの人びと、少なくともムージルは、ちょうど100年前の大戦の勃発時には「総体的な大変革、革新を期待した」¹⁰⁾ (Amann 145)。当然ながらそれらの期待は敗戦時には幻滅に終わる。ただし今度は敗戦時に米国大統領ウィルソンが提示した14ヶ条のプログラムが新たに期待を集める。「ヨーロッパの公正で民主的な新秩序」(Amann 11)に寄せられた期待は、ヴェルサイユ条約およびサンジェルマン条約の各国の思惑の絡んだ惨憺たる結果によって、またも幻滅に終わる。人びとは「魂の真空 (das seelische Vakuum)」(P 1062)を思うことになる。開戦時の美辞麗句、終戦時の美辞麗句、ともに理想や革新を謳いながら、結果的にただ人心をもて遊んだ

けに終わる。さらに天文学的なインフレーションが恒産を皆無にし、恒心をも皆無にしようとする¹¹⁾。第一次世界大戦以降のドイツ語圏では、理想を語る言葉や理念が、なかなか現実と対応しないという経験を積み、独立した個人の無力感を覚える人びとが少なくなかった。「自分の意志という幻想にうち満ちて、人は言いなりに従った。われわれがやった、彼らがやった、いや誰でもない、《それ (Es)》がやったんだ。」(P 1062)¹²⁾このようにして「真理や自由といったものの顔面に拳骨を浴びせられる」以前に、すでに真理や自由といったものには小刻みに、あるいは大なり小なり打撃が浴びせられていた。ナチスへの下塗りがじわじわと進行していた。

「真理や自由といったもの」への信頼ないし確信はしかし、ゲッベルスをはじめとするナチスのプロパガンダがくり返しそれらの価値を否定するにつれて、さらに揺らいだように見える。ムージルも日記ほかに書きとめている。

ゲッベルスによれば、悟性、理性、知性は無である。悟性はすべてをふたつの側面から見、知性は決して創造的ではありえず、理性は新たなものを何も生み出さない(アスファルト文学以外は)。芸術のための芸術(L'art pour l'art)という原理は「まったくのあやまりで、すでに克服されている」(T 824)¹³⁾。

「道徳上の自己責任をもつ個人の根本的権利、意見を表明し意見を耳にする自由、譲ることのできない信念の体系……こうしたものすべてが、常日頃それを衷心から信じていた何百万という人びとから、一撃のもとに剥奪された——彼らはそれを防ごうと指一本動かすことはなかった！」(P 1415)¹⁴⁾。

これらの動きと、ムージルは無縁ではなかった。そもそも『特性のない

男』とは何だったか。少なくとも大枠においては、人間は交換可能なさまざまな属性 (Eigenschaften) から成り立っており、ある巨大な構図から見れば、夫 (「グリージャ」における homo) も妻 (「愛の完成」におけるクラウディーネ) も交換可能な、ないし特定の相手に限定されない存在でありうる、という内容が、作家ムージルの仕事の一面にはあった。もちろん「特性のない男」ウルリヒは、交換可能な諸属性にもかかわらず「魂をもっている」のであって、少なくとも本人と作者にとっては交換可能な人間ではないのであるが。理念についてはどうか。シュトゥム・フォン・ボルトヴェール将軍が部下を動員して作成した「理念の指揮官の表」によれば、「烏合の衆」(M 374) であった¹⁵⁾。すでに1918年にトーマス・マンは『非政治的人間の考察』において、拠り所とすべき諸理念が流動化、相対化される有様を結果として表示していた¹⁶⁾。『魔の山』(1924年)において理念はセテムプリーニとナフタの「陣取り」の駒のようなものになっていた。そして『特性のない男』(1930年)のウルリヒにとって、善悪は「関数値」であって、その時々状況という変数と主体の投入によってはじめて決する一回限りのもの (エッセイismus) となっている¹⁷⁾。信念 (Überzeugtheit) についてムージルは、自分の「帰納法的謙虚」¹⁸⁾ になじまないと述べている。

「芸術は不道德なもの、最も非難されるものを描いてよいばかりでなく、愛することすらしてよいのである」(P 979) とムージルは1911年のエッセイ「芸術における猥褻なもの」と病的なもの」において主張していた¹⁹⁾。脳裏をかすめる想念、とっさに抑圧される断片的な欲望の萌芽、そのような未生の情動もまた人間の真実の一部であり芸術の素材となりうるという、まっとうな意見であった。もともとは、ある雑誌の発禁処分にたいする抗弁として書かれたエッセイであったが²⁰⁾、著者が無名にちかひムージルであっても (とはいえ1906年の『陸軍生徒テルレスの混乱』はロングセ

ラーであった)、美学論文の枠を越えて、ヨーロッパにじわじわと浸透していった可能性がある。筆者は昨年ブルーストの『失われた時を求めて』前半部とムージルの作品を比較する研究を行ったが、まったく接点のない、それぞれが他の作家の作品を読んでいない両作家であるのに、作品中には無視できない頻度で、類似の発想、ないしほぼ同一の認識などを認めることができた。当時はフランスなら主にサロン、ドイツ・オーストリアでは主にカフェで連日談話が行なわれ、さらに新聞のフェュトーン(文芸欄)が——他紙からの転載も含めて——新たな芸術思潮などを伝えていたため、情報の共有、傾向の伝播が可能であったと推測している²¹⁾。

大方の批判はありうるが、きわめて大雑把に捉えると、18世紀は理性と理想の時代、ないしその実現を求める世紀であった。19世紀は「病気」の世紀であって、理性と理想に対応しないもの、しきれないものの反作用であった。そして20世紀は狂気ないし境界例の世紀ではなかったか。つまり先行する二つの世紀から漏れたもの、ないし「病気」よりもさらに異常に類するものに関心が向けられ、それらが力を発揮したのではないだろうか。

脳裏をかすめる不屈きな想念の例が『特性のない男』に書かれている。「雄弁家がひしめく世界的な議事堂であろうと、少尉1名と兵士8名いれば全員拘束できる」(M 306)という考えで、あたかもナチスの突撃隊や親衛隊がムージルの長編小説から学んだかのようなのではないか²²⁾。小説には、以上に続けて次のような文章がある。「この種の考え方自体は、一喝して退けられてはいたものの、すでにとうの昔から、不気味な夢にも似た荒々しいエネルギーをもっていた」(M 306)。小説の刊行後わずか3年にして、このエネルギーは発現の場をもち、しかも「一喝して退けられる」こともなくなっていた²³⁾。

上記の引用文を含む『特性のない男』第72章「科学のほくそ笑み、あるいは悪との第一次正式手合わせ」では、現代人の骨の髄まで浸透した「原

悪」とも言うべきものが論じられる。「もはや人生において信頼できるものは鋸と釘で留められたものだけという段階に達したものが、科学の客観性に包括されている一種の根本感情であり」(M 303), 「(…) この正真正銘の真理愛の周囲を、幻想打破, 強制, 無慈悲, 冷酷な威嚇ならびに辛口の叱正への偏愛がとりまいている。これらは陰險な偏愛と言って悪ければ, どうにも抑えようのない, この種の感情の発露には違いないのである」(M 305)。そして「この種の感情」をおびた科学的精神は, 思想や美德についても陰險な作用を及ぼしてくる。

海千山千の時代特有の, この熱狂的卑小化の傾向 (Verkleinerungswut) はおそらく, もはや粗野と高貴という人生にはじめから備わっている二分法などではなく, むしろ精神の自虐 (ein selbstquälerischer Zug), 善もまた貶められ, いとも簡単に破壊されうる場合にたいする言い表しがたい嗜好といったほうが, はるかに真相に近い (M 306)。(傍点筆者)

この「熱狂的卑小化の傾向」, 「精神の自虐」が, 当時のドイツにすでに蔓延していたのではないだろうか。『特性のない男』第72章「科学のほくそ笑み……」を読む者は, まるでナチスがこの章から3Dとなって出現したかのような思いがするのではないだろうか。1930年11月の『特性のない男』刊行からわずか2年2ヶ月でヒトラーは政権をとったが, この本が予言の書であったわけではない。すでにミュンヘン一揆は1923年に起こっており, ナチスはそれ以前から徐々に力を蓄えていた²⁴⁾。むしろ, より大きな流れのようなものがあり, その発現が一方では小説となり, また一方では政治集団となったのではないか。むしろそれぞれの本質は正反対ではあるが, 上記のように共通する基盤を認めることは可能と思われる。

反ユダヤ主義とムージル

ゲッベルスによれば、1933年1月30日（ヒトラーの首相就任）をもって「極度にユダヤ化した知性主義の時代」は終わった。つまり知性「偏重」がユダヤ化の忌まわしい症例であって、今後はそれと手を切るということである。先述の未完に終わったエッセイ「スローな男の懸念」（1938年）の草稿にムージルは以下のように記している。

2) [ナチスから] 距離をとる者を、ほかならぬア〔ンチゼミティスムス（反ユダヤ主義）〕が、ドイツの未来に対する憂慮、いや絶望で満たす。反ユダヤ主義がナチスの単なる「宣伝活動の手段」だと考えるのは誤りだ。反ユダヤ主義は「第一教義」である。更新運動（Erneuerungsbewegung）のためにわれわれが恐れるのは……机……敵——しかし、いかにそれを証明しようと試みても、われわれはユダヤ人の影響下にあるという説明で片付けられてしまう。今日われわれができることは、おそらくきわめて地道な義務を果たすこと、ごく限られた領域で証言することだろう（P 1426）。

このような一節を含むエッセイを、オーストリア併合後のドイツ語圏の『新展望』（Die Neue Rundschau）に発表することは不可能だったろう。すでに見たように「悟性、理性、知性は無である」とする支配者側に対して、「ユダヤ化した知性」の側から批判しても、効力はなかった。それまで最先鋭の知性として日常レベルの言語や概念の脆弱性を指摘し、理想や理念の基盤を掘り崩してきた知識人達が、まさに自分たちの仕事の結果として、自分たちの無力を招来してしまったかのようである。ナチズムは、単にあらゆる災厄をユダヤ人に押しつけるだけでなく、ナチズムを批判す

る精神をも「ユダヤ化した知性」として無効とする、それなりに堅固なバリアーを張った完結したシステムであって、その支配圏の内部にあって批判ないし革新を図ることは、ほぼ不可能だった。わずかな可能性があるとするれば反乱か暗殺しかなかったであろうが、それらも封殺された。

反ユダヤ主義については、周知のようにアドルノが『権威主義的パーソナリティー』で米国の多数の被験者から一定の見解を導出している。先入見に捕われやすい人びと、ファシズムの扇動に乗りやすい性向ないしメンタリティーを強くもつ人びとは、

「恐怖」、「弱さ」、「消極性」、「性的衝動」および権威ある人びと（とりわけ両親）への「攻撃欲」、自分の内部にあるこれらの要素を、抑圧しつづけようとする。彼らはこれらの要素を自我のなかに組み込むことができず、自我の外部に押しつける。かくして彼らはこれらの要素を自分自身とは見なさず、他人たちを敵意のある脅威的な存在と見なすのである²⁵⁾。

アドルノによれば「投射 (projection) はエス衝動を自我とは無縁とし続ける手段である。投射は、自我がその機能を十分に発揮できていない兆候と見なされうる」(前掲書 S. 60)。「自我の内部の《ネガティブなもの》を否定しようとするメカニズム」(前掲書 S. 458) は、普通の人の内部でも作動しがちな心理的トリックであって、その意識されざる欺瞞のお蔭で自分が清く正しく強いと思い、他者が邪悪で愚かで弱いと思いこんでいる一般人は珍しくないであろう。ナチスの反ユダヤ主義をそれだけで説明することは恐らくできないにしても、心理的防衛機制の一種が国家的規模に膨張しようとする手前で、心理学が正体を看破して無効化することはできなかったらうか。あるいは、まさに「ユダヤ的知性」として斥けられただ

ろうか。

むろん生前のムージルの上記のアドルノの戦後の仕事を知る機会はなかった²⁶⁾。ムージルの「建設的イロニー (die konstruktive Ironie)」は反ユダヤ主義の防衛機制とは正反対である。

イロニーとは、聖職者を、ボルシェヴィキにも同じことが言える、という風に描くこと。馬鹿者を、突然作者が「部分的にはおれ自身も同じだ」と思うように描くこと。このようなイロニー、つまり建設的イロニーは今日のドイツではほとんど知られていない。ものごとの連関から建設的イロニーは裸形で現れる。人びとはイロニーを嘲笑とか馬鹿にする行為だと思っている (M 1939)²⁷⁾。

嘲笑したくなるネガティブな要素をも自分自身の内部に認める建設的イロニーは、長編小説の執筆には有効な手段であって、「敵意と共感 (Feindschaft und Mitgefühl)」をもってそれぞれの登場人物を描き分けることを可能にした²⁸⁾。それではムージルのこの建設的イロニーを発揮して反ユダヤ主義にも一定の理解を示したのだろうか。皆無である。「ドイツ人と黒人 (Neger) に違いはないとぼくは思っている」(P 1364)²⁹⁾とムージルは記している。

われわれの民族的理想主義のかなりの部分がこの思考の病気 (Denkkrankheit) に基づいていることは否定できないだろう。

その結果どうということになるかは想像に難くない。あらゆるものの善悪について個人が責任を問われなくなり、人種の^{せい}所為だということになれば、いつも他人の^{せい}所為にして言い逃れをするのとまさに同じことになる。行き着くところは、誠実さ (Wahrhaftigkeit) や知的な繊細

さが鈍磨するだけでなく、モラルの胚細胞 (Keimzelle) の硬直である (P 1064f)。

ムージルの1921年のエッセイ「理想としての国民と現実としての国民」(『新展望』32/10) で警告したにもかかわらず、事態は彼の予見したとおりに行き着くところまで行ってしまったのである。

ぼくは態度表明はしない (*ich nehme nicht Stellung*)

ムージルの「建設的イロニー (die konstruktive Ironie)」は、ネガティブな要素をも自分自身の内部に認め、「敵意と共感 (Feindschaft und Mitgefühl)」をもって対象を全面的に把握する有効な手段であった。しかしそれは同時に、敵味方の峻別を困難にし、往々にして割りきれない無理数を小数点以下に引きずるような優柔不断にもつながる。1935年6月パリの共済^{ミュテュ}会館^{アリテ}で行なわれた「文化擁護のための国際作家会議」の初日に3人目の論者として登壇したムージルは、文化は常に国家を超越していた、「その最も高度な段階においては (…) 超国家的諸関係に依存してきた」(P 1264) 云々と語り、3,000人の聴衆の大方の響響を買った。もともと人民戦線路線 (それまでの社会民主党敵視をやめ、ナチスに対抗するために協調を図るもの) へと転換したスターリンが2年前にバルテウスと談合して計画された、コミンテルン主導の「パリ会議」であることを、ムージルは後から知った。集団主義 (Kollektivismus) という言葉でポリシェヴィスムもファシズムも一括りにしてプーイングを誘ったのも、当時は不器用であったかも知れないが、今日のみから見て、いや会期中に「パリ会議」を総括しても、誤った姿勢ではなかったと思われる³⁰⁾。『特性のない男』の著者は、以前から「集合主義 (Kollektivismus)」の将来、「蟻のような人間」(T725) の未来形態を注視していた³¹⁾。第三帝国が消滅し、ソ連も消滅した今日の眼からみ

れば、ファシズムにもスターリニズムにも組みしなかったムージルの姿勢は適切だったと思うのは容易だけれども、1935年当時、作家仲間の多くが共産黨員となり、あるいは知人や出版関係者がナチ黨員となり、公官庁のあれこれのポストがナチ黨員で置き換えられていた只中で、つまりそれぞれ逆向きに回転しようとする多数の歯車のあいだにあって、旗幟鮮明にせぬまま耐えるには、かなりの胆力と知力が要請されたであろう。1939年3月にムージルと会見したイニャッツィオ・シローネは「政治に対する彼の見解を厳密に規定することは、まったくもって難しかった」と記している³²⁾(KC1339)。

ぼくは態度表明はしない (*ich nehme nicht Stellung*)。ぼくがどこに立つことになるのか、精神はぼくをどこに導くのか、ぼくは知らない。
それはダイヤモンドだろうか、それとも客観性だろうか？ (T 852)

1933年末にムージルは日記にこう書きこんでいる。アーマンによればムージルがどこに立つことになると、「彼は《精神》に付きしたがう決心だった。すなわちムージルのいう精神とは、(党派に)左右されないこと、自律性、均衡のとれた知性と感情、清廉潔白 (*Integrität*) および単独者であることで、その意味するところは、何らかのグループ、党派ないし徒党に顧慮することなく彼が単独で決定するということである。こうすることでムージルはケースバイケースで、先入見に囚われることなく、策略的な配慮なしに、イデオロギーの拘束なしに、賞賛と批判、好意と反感を表明できたのである」(Amann 26)。

亡命と死

1938年8月に「旅行」と称してイタリアへ脱出した時点で、ムージルは

すでにナチスの支配するドイツにこれ以上滞在することは危険であると判断していたはずだ。同年12月31日、「有害にして好ましからざる著作一覧」に『特性のない男』と『生前の遺稿』が載った。2つの理由が考えられる。「旅行」から帰国しないムージルが事実上亡命したとナチスが看破したか、あるいはムージル夫人のマルタがユダヤ人であることを突きとめたか、ないし両方である。コリーノが提示する記録を見るかぎり、ムージルはなぜ上記の2書が禁書に指定されたのか理由が分からず、また禁書が解かれる可能性があることを信じているという態度をとっていた³³⁾。推測するに、篤志家の寄金だけが頼りのムージルは、スイスあるいはオランダの出版社となんとしても出版契約を結び、前払い金などを得る必要があった。ドイツ語圏の読者が自分の本を購入する可能性が残っている、という状況把握を、ごく身近な人びとも印象づけなければならなかったのである。実際のところムージルは、トーマス・マンのように公にナチス批判を表明することはなかった。いわば平行運動 (Parallelaktion) 的にマンとムージルは——マンが数歩先を歩んで——亡命のプロセスをたどっていた。すでにマンは1933年2月11日のミュンヘン大学における講演「リヒャルト・ヴァーグナーの苦悩と偉大」に対して反論をうけ³⁴⁾、同年5月11日にベルリンで2万冊の書籍とともにトーマス・マンの本が焚書に付された³⁵⁾。それでもマンの国籍および市民権剥奪、財産没収は1936年までの猶予があった。つまり作家と国家との断絶には段階があり、双方の躊躇と逡巡が一定期間続くのであって、ナチスとしてもノーベル賞作家 (1929年) マンを斬り捨てるにはいくつかの抵抗を乗り越える必要があった。ムージルに対して具体的にナチスがとった手段は、1939年1月30日に執筆停止処分 (Sperrkarte) を出した (KC 1314) のが最後であって、まだ最終的決裂に至ってはいなかった³⁶⁾。

コリーノによれば1939年4月4日、奇しくもヒトラーが、9月1日の

ポーランド侵攻を用意せよとの特命を国防軍に与えた翌日に、懇意なオットー・ヴィルツ〔Otto Wirz 1877-1946 スイスの作家〕を通じて政治部、すなわちベルンの外務省にムージルはデリケートな質問をした（KC 1338）。ヴィルツは次のように記している。「著名なドイツの作家、アーリア人、亡命者、〔第一次〕大戦ではオイゲン大公軍の政治方面の参謀部メンバーだった者が、わたしに問い合わせさせてきている。彼の言い方によれば、悪魔が襲いかかってくる場合、彼が第一次世界大戦のときと同様に、スイスの主務官庁に任用を許可される可能性があるかどうかについてである。（…）彼とはローベルト・ムージルである」（B 970）。すなわち58歳のムージルはナチスがスイスを攻撃してきた場合、スイス軍の後方支援に就きたいと申し出たのだ。しかもナチスを悪魔（Teufel）と呼んでいる。

これには経済的理由も作用しているだろう。すなわち軍務に就けば収入を得られるし、かつてポーツェンで『兵隊新聞』編集長として培ったノウハウを生かすこともできる。それにしてもナチスと緊密に連絡をとっていた「黒いスイス」³⁷⁾の政治部に、このような打診をするとは、よほど経済的逼迫のために判断力が鈍ったか、非公式ながらナチスに敵対する態度を表明する決断をしたかのどちらかであろう。

すでにトーマス・マンの身に及んでいたナチスの弾圧が、ムージルにもエスカレートしてくるであろうことは予測できた。カーチャ・マン（Katia Mann, geborene Katharina Hedwig Pringsheim 1883-1980）がユダヤ系であるのはほぼ周知のことだった³⁸⁾。マルタ・ムージル、旧姓マルコヴァルディ、旧姓アレキサンダー、旧姓ハイマンがユダヤ系であることは、容易に明らかにならなかったであろうが、ナチスが調査に乗り出せば早晩結果がでたことであろう³⁹⁾。1935年9月ニュルンベルク党大会で公表された「ドイツ国公民法」および「ドイツ人の血と名誉を守るための法律」（ニュルンベルク血統保護法）（Gesetz zum Schutze des deutschen Blutes und der deutschen

Ehre) は、ドイツ国公民 (Reichsbürger) とそれ以外の国籍保有者 (Staatsangehörige) との婚姻および性交を禁じた⁴⁰⁾。このニュルンベルク諸法が有効である限り、ムージルのドイツ国復帰も、彼の作品の出版、販売もものはやありえなかった。1942年3月20日、それまで留守にしていたウィーンのラズモフスキー街20番の住居をウィーン市の指示により明け渡し、ムージルの書籍、草稿ほか家財一切が倉庫に保管される。3月12日に大型爆弾が倉庫に命中し、大きな損害をもたらした⁴¹⁾。その翌月の4月15日、マルタとの結婚記念日にムージルは世を去った。筆者は自然死ではないのではないかと思い、可能な限り調査したが、医師による死亡診断書はどうしても入手できなかった⁴²⁾。

冒頭の「脱深刻化」(Enternstung) に話を戻そう。ムージルの描くカーニエンの「国家哲学」は Fortwursteln (どうにかこうにか誤魔化してやってゆく) だった (M 216)。オーストリアとハンガリーを二重帝国にして、オーストリア皇帝がハンガリー国王を兼ねるなどという腑に落ちないやり方もその一つだろう。プロイセンの、おそらく「国家」ではなく、民間哲学は Enternsten だったのではないだろうか。緻密かつ几帳面な仕事ぶりと表裏一体を成して、いざとなるとこの「脱深刻化」に逃げこむ、あるいは開き直る癖があるのではないだろうか。

筆者は2013年9月にオペレッタ『月の女王』(Frau Luna) を観劇した⁴³⁾。終幕近くで月が軌道を外れてあわや地球と衝突しそうになる。舞台は赤く明滅しアラームのブザーが鳴り響く。そこで月の女王は

Na, und ? (それがどうした?)

と言うのである。筆者はハッと、それから重苦しい思いに捕われた。オペレッタを見て胸が悪くなったのはそれが初めてで、今のところ最後である。

引用文献略語一覧

- (M) Musil, Robert : Gesammelte Werke 1 . Der Mann ohne Eigenschaften. Neu durchgesehene und verbesserte Ausgabe. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1978
- (P) Musil, Robert : Gesammelte Werke 2 . Prosa und Stücke. Kleine Prosa, Aphorismen, Autobiographisches. Essays und Reden. Kritik. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1978
- (T I) (T II) Musil, Robert : Tagebücher. Hrsg. v. Adolf Frisé. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1983 (Band I und II)
- (B I) Musil, Robert : Briefe 1901-1942. Mit Briefen von Martha Musil, Alfred Döblin, Efraim Frisch, Hugo von Hofmannsthal, Robert Lejeune, Thomas Mann, Dorothy Norman, Viktor Zuckerkandl und anderen. Hrsg. v. Adolf Frisé. Unter Mithilfe von Murray G. Hall. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1981
- (B II) Musil, Robert : Briefe 1901-1942. Kommentar, Hrsg. v. Adolf Frisé. Unter Mithilfe von Murray G. Hall. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1981
- (Amann) Amann, Klaus : Robert Musil – Literatur und Politik. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 2007
- (Bb) Corino, Karl : Robert Musil. Leben und Werk in Bildern und Texten. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1988
- (GL) Hayasaka, Nanao : Robert Musil und der genius loci. München (Wilhelm Fink) 2011
- (KA) Robert Musil Klagenfurter Ausgabe. Kommentierte digitale Edition sämtlicher Werke, Briefe und nachgelassener Schriften. Hrsg. v. Walter Fanta, Klaus Amann und Karl Corino. Klagenfurt : Robert Musil-Institut der Universität Klagenfurt. DVD-Version 2009
- (KC) Corino, Karl : Robert Musil eine Biographie. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 2003
- (LWW) Robert Musil. Leben, Werk, Wirkung. Im Auftrag des Landes Kärnten und der Stadt Klagenfurt Hrsg. von Karl Dinklage. Zürich, Leipzig, Wien 1960
- (RMSZW) Robert Musil Studien zu seinem Werk. Hrsg. v. Karl Dinklage zusammen mit Elisabeth Albertsen und Karl Corino. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1970
- (阿部) 阿部良男 『ヒトラー全記録』 柏書房, 2001年

注

- 1) Barnay, Paul. 1884年～1960年。1921年から1933年までプレスラウの合同劇場（ローベ劇場とタリーア劇場——のちゲーアハルト・ハウプトマン劇場）の支配人。マルレーネ・ディートリヒほかの名優、名演出家を育成。ユダヤ系のため公職から追放され、1938年のオーストリア併合以降、逃亡先のハンガリーで強制労働に従事。1948年から1952年までウィーンの Volkstheater の総監督。本件については1933年3月12日の『フランクフルト新聞』（Frankfurter Zeitung）を始めとして、いくつかの新聞に記事が出た（KC 1123）。
- 2) 筆者には以前から、屍臭と血の匂いのするこの時代を避ける傾向があった。少なからぬ文献に一抹の猟奇趣味や頹廢が感じられたことも一因である。それでもムージルがこの時代を生きていたのは事実であり、その時々々のムージルの反応を把握し分析することにより作家ムージルの姿をより多面的に、正確に理解することは可能であろうと判断した。ちなみに筆者の目にふれた2、3の解釈を示しておく。「ヒトラーに権力を獲得させた主な罪を担うべきは、とくに、〔ヴァイマル〕共和国の労働者大政党間の不和だったからであります」プレヒト、ベルトルト：1943年12月1日付のトーマス・マン宛の手紙。（阿部221頁）「有澤広巳教授の分析。1. ヴァイマル共和国はいわば即興的に打ち出されたもので、熟慮設計されたものでな（かった）。2. ドイツの一般国民は、（…）民主主義議会政治に対しては一定の距離をおいていた。3. 重大なのは、ヴェルサイユ条約の苛酷な内容の重荷である。強制的に条約を呑まれた当事者に対しては、（…）その懸命な政治努力は評価されず、常に国民的に非難された。4. 民主的なヴァイマル憲法下で、国内の民主化は進まず、民衆の間には新風が吹き通らなかつた。5. 1930年代はじめには議会が機能しなくなり、憲法48条による大統領緊急令の発動による政治に変質してしまった。誠実な人物であるブリュニング首相の罷免のち議会は形骸化し、ヒトラーへの道を開いてしまったのである」（阿部214頁f）。
- 3) Enternstung という単語は、KA では19回ヒットする。enternstet で検索すると21回ヒットする。主に遺稿ファイル（Nachlass Mappe）に出現しており、1920年代から散発的に書きとめられている。出現のかたちは3つあり、索引（Register）として（「可能性感覚」と並置されているケースもある）、関連項目として（他の遺稿ファイルの関連項目の指示）、文章そのものとして（ただし断片的で真意を量りがたいものが多い）、である。政治的、文化的、心理的など様々な場面で使用されており、ムージルの Enternstung を正

確に把握しようとするならば一書を要するであろう。本稿では〈脱深刻化〉が、「成り行きに任せる」(Gewährenlassen)、「無力」(Ohnmacht)と併記されたテキスト(Mappe VII/1 „II-Aktion, GfL, Tzi, Gn“ VII/1/ 146 Af 13 15/38/1)(1926年~27年頃)を基盤として論を進める。真意を量りがたい文の例として以下のTIの文を挙げる。

「肝腎なのは平均的人間を、この世のあらゆる残虐行為の保菌者として描くことだ。フランス帝国主義の男、ハンガリーの白色テロの男。脱深刻化された人間」(TI 443)。

- 4) 1933年2月27日の国会議事堂放火事件の翌日、大統領緊急令が發布され、「ヴァイマル憲法で認められた言論の自由、報道の自由、郵便および電話の秘密、集会および結社の自由、私有財産の不可侵性などが停止されることになる(…)」。(阿部220頁f) 3月14日共産党禁止。同日および5月に共産党は統一戦線結成を社会民主党に提案するが成功せず。3月23日首相ヒトラーへの「全権委任法」成立。6月22日社会民主党(SPD)禁止令。以上の措置等によりナチス批判を代弁する組織は壊滅した。
- 5) その後ミューザームとオシエツキーは拷問により殺された。
- 6) これはぎりぎりのタイミングだった。同年9月29日にドイツ・スイス間で条約が調印され、「ドイツはユダヤ人のすべての旅券にユダヤ人を識別するJ印を付ける」ことが規定された。マルタの旅券にJ(イエー)がスタンプされることはなかった。
- 7) ベンション・シュテルンはクーアフルステンダム217番の上階にあり、直交するFasanenstraßeの街路樹を見おろす快適で静かな環境だった。同じクーアフルステンダム233番、カイザー・ヴィルヘルム教会付近にはマルタの姉、ヨハナ・カスパーが住んでおり、マルタにとっても便利な宿泊地であったと推測できる。(GL 207ff 参照) なお姉ヨハナは1941年ないし1942年にテレージェンシュタットに移送され、1944年に火葬された。(KC 1861)
- 8) 差別用語の恐れのある語には傍点(・)を付した。もとより筆者にはこの種の差別を助長する意図はない。
- 9) 社会民主党は120議席、共産党は81議席、中央党73議席、ドイツ国家人民党52議席、バイエルン人民党19議席であった。(阿部222頁) ナチスはクルップからの100万ライヒスマルクなど財界から巨額の支援を受けて強力な選挙キャンペーンを張り、テールマン逮捕など、あらゆるアンフェアな手段で左翼勢力を圧殺しようとした。それでも共産党および社会民主党に1100万を超えるドイツ国民が投票した。彼らがその後どのように抵抗したのか、ないし抵抗しようとしたのかについては、手元に資料がない。ヒトラーはこの時

- 「4年間の任期を与えよ」と巧妙に訴えた。また反ユダヤ主義を老獪に隠したため、ユダヤ人全国連盟のようなヒトラー支持団体が生まれさせたという。
- 10) 「1914年の夏の体験、いわゆる偉大な時代への高揚」(P 1060) のもつ重みから、ムージルの作家としての仕事が広い意味でこの体験の前史とその克服に捧げられていることが分かる。(s. Amann 8) 『特性のない男』が終結部において戦争になだれ込む予定であったのは周知のことだが、「戦争」とは大戦勃発時の病的ないし異常な高揚を意味しており、そこに『特性のない男』の登場人物達のさまざまな試行が呑みこまれて行く、という枠組みを見誤ってはならない。さらに、ムージル文学の解釈という次元をはなれて一言すれば、一般に開戦時には、いわば民族のアドレナリンが大量に分泌されるのであって、敗戦時に翼賛的な作家や詩人を弾劾してもほとんど意味はない。ムージルも記しているように国家間の争いとなると忽ちケダモノ・レベルに墜ちる国際関係が問題なのであり、いわば国家心理学ないし動物行動学等による分析と各種防御対策の構築が急務であろう。
- 11) ムージルの父アルフレートは、ブリュン工科大学の学長を二度にわたって務めたので、通常であれば退職金、年金等により安定した老後が見込まれたが、1918年のチェコスロバキア独立により、それまでのハプスブルク帝国内の貢献はゼロと見なされ、アルフレートは非常勤講師として働き、さらに下宿人を置いて糊口をしのぐことになる。マルタはユダヤ系の銀行家の娘として、おそらく莫大な資産をもっていたが、インフレーションでそのほとんどが灰燼に帰する。マルタが幼少時を過したアレキサンダー家のあったマタイ教会通り1番は、現在ベルリン・フィルハーモニカーの敷地となっている。一等地である。
- 12) 「理想の国民と現実の国民」より。本稿では詳述しないが、ムージルはこの「それ (Es)」の解明にとり組んでいる。議会制民主主義は、結局利益代表組織間の民主主義でしかありえず、個人と国家、私的生活と公的生活をカバーして繋ぐものが欠けている等々。つまりは戦後の体制、人間の生活全体が、絶対的な倒錯 (T 661) であるとみる。それに対置されるのが「別の状態」(AZ) である (Amann 21)。
- 13) コリーノによれば、ゲッベルスは同じ主旨の発言をあちこちで行っている。「ここ数年われわれは、自由主義のほとんどグロテスクに思える狂宴を見てきました。民衆とはそもそもまったく無関係な芸術が、ごく少数の上流層によって購われ、受け入れられていたにすぎないことを目にしてきました。(…) 芸術が民衆を見捨てたように、民衆は芸術を見捨てたのです。こうした状態を簡潔に表現する言葉があります。それは芸術のための芸術で

- す」。Helmut Heiber (Hrsg.): Goebbels-Reden. Bd. 1 (1932-1939). Düsseldorf 1971, S. 83. (KC 1784).
- 14) 草稿「スローな男の懸念」(Bedenken eines Langsamen)の一節。『新展望』(Die Neue Rundschau)に載る予定だったが未完に終わった。コリーノによれば、『新展望』のユダヤ人の原稿審査員ルートolf・カイザー [Rudolf Kayser 1889-1964] は1932年12月に解任され、「アリア人」ペーター・ズーアカンフ [Peter Suhrkamp 1891-1959 ドイツのズーアカンフ出版社の設立者] に代わった。草稿はズーアカンフの徳憑によると考えることができる。ズーアカンフの方は「33年3月」に関するエッセイで、国家社会主義へのある種の共感を表明し、1933年の〈決起〉と1914年8月の周知の陶酔のあいだには類縁性があると指摘した (KC 1125)。ムージルの結論によれば、昨日の聖なるものが彼らにはもはやそれほど聖なるものではなくなったか——それとも今日の間が、自ら思いこんでいたほどには自立しておらず、「集団をなして初めて強固なものとなる」かのどちらかだった。この後者の、「国家社会主義が織りこみ済みの」(P1415) 結論は、人間は無定形であり、あらかじめ与えられた形式に順応する (P1371ff.) というムージル自身のテーゼとも相通じるところがあった (KC 1127)。
- 15) Sauhaufen.『特性のない男』第一巻第85章でシュトゥム・フォン・ボルトヴェール將軍は陸軍の手法にしたがって理念の指揮官、思想の集団の配置図を作成する。「これらの思想の集団は、戦闘員とその武器になる理念の補充とを、味方の留守部隊からばかりでなく、敵方の留守部隊からも引き出している(…)。彼らは絶えずその戦線を変更して、なんの理由もなく突然寝返りを打って味方の陣地に挑む始末だ。(…)いろいろな理念が絶えず敵方に流れ込んで、また戻ってきて、そのためあるときはこの戦線に、またあるときはあの戦線に、という具合(…)」(加藤二郎訳『特性のない男II』松籟社、1992年、154頁)。
- 16) 若槻敬佐『「非政治的人間の考察」における相対化のバトス』(『山形大學紀要. 人文科学』10(2), 1983年) 45-61頁参照。
- 17) 「エッセイとは、ある一人の人間の内的な生命がある一つの決定的な考えにおいて取る、一回的で不変の形姿である。これは普通主観性と言われているようなさまざまな思いつきにありがちな無責任や中途半端とは全く関係がない、だが、エッセイに結実した考えには、真だとか偽だとか、賢いとか愚かだという概念もあてはめることはできない。こうした考えもまた、繊細で言葉にはならないのと同じくらい厳密な規則に従ってはいるのだけれども。」(M 253) 恒川隆男訳。オーストリア文学会研究発表会 (2013年5月) 配付

資料。

- 18) 「ぼくは自分の真摯さ、初期の一群の著作の姿勢を貫徹していない。そうするためにはパトス、信念 (Überzeugungtheit) が必要だ。しかし信念は、多くの《帰納法的謙慮さ》とは相容れない。相反する方向に向かって動くぼくの知性とも相容れない。この知性の昂^{たか}ふりと激しい情熱を、イロニーによって補完することが不可欠だ。(T I 973) 「ぼくの《帰納法的謙慮さ》(meine „induktive Bescheidenheit“)とは、未来のレベルから見て、現在の自分の判断は誤謬とならざるをえない、というムージルの見方であろう。
- 19) 「この《我独りとともにあること》のなかには断想の線や想念の軌道の白痴状態があり、魂は最も堅牢なもの最も信頼すべきものの周囲にざわめきつつ空虚に乱雑に丸められている。——これは抑制である(…)。そして飛散。もつれあい紛糾していたものがほどけて、ひらひらとひらめく。自我 (Ich) は緩慢に揺れながらひらひらと舞う。遠くの方に色あせて随伴していた想念、いつもは抑圧され時おり駆動される半端なプロセス、これら興奮の断片の数々はけって完成されることがなく、それでもやはり性的で、それでもなおこの場では禁断のもので、それでもなおプロメテウスのものだが、これらの興奮の諸部分がはじめて感知されるものになる。」(『ムージル・エッセンス 魂と厳密性』中央大学出版部 2003年、5頁f.) ムージルはこのように人間の深層の想念の流れを追ってみせる。「現実のなかで一滴の熱い雫のように凝縮されているものが、芸術のなかでは、溶解され、分解され、別な風に組み合わせられて、——聖別され、人間化される」(同9頁)。
- 20) 1911年1月、アルフレート・ケルの編集する雑誌『牧神』(Pan) 第6号に「若きフロベールの日記」(初の独訳)が掲載され、この号は発禁となり残部6部が押収された。(『ムージル・エッセンス』巻末参照のこと。)
- 21) 早坂七緒: Luftinfektion? (空気感染?) ——ムージル研究者がブルーストを読んでみる——。日本オーストリア文学会秋季研究発表会(札幌)2013年9月(口頭発表)。なおフェュトーンによる伝播については、ヨーゼフ・シュトルツ博士(クラーゲンフルト)による助言を得た。
- 22) 1933年2月28日(国会議事堂放火事件の翌日)、大統領緊急令を受けて、ゲーリングは4000人の共産党員の逮捕を命令、社会民主党の機関紙も発行停止。3月3日共産党党首エルンスト・テールマン逮捕(1944年ブーヘンヴァルト強制収容所で殺害)。3月9日共産党が非法となり、85名の国会議員(475万票獲得)は議席を剥奪された。(阿部221頁～)2月1日国会解散から3月5日の選挙日までの期間、突撃隊、親衛隊、鉄兜団などナチ党員が補助費警察官とされ、3月8日には(バイエルンを除き)すべての連邦に警察代

理執行官が任命される。全権委任法が可決された3月23日、臨時の国会議事堂にあてられたKrolloper（クロール・オペラ劇場）は、武装したSSとSAの脅迫行為のもとにあった。

- 23) 数少ない例外がケーラーであった。コリーノによれば、ムージルの知人や友人のうち、心理学者ヴォルフガング・ケーラー〔Wolfgang Köhler 1887-1967〕のような、市民としての勇気をもっていた者はわずかだったようだ。ケーラーは『一般ドイツ新聞』（Deutsche Allgemeine Zeitung）でナチスに対する激しい攻撃を公にし、それが号外で広まった。ベルリン大学の彼の研究所を、突撃隊（SA）の制服を着た学生たちがかきまわり、彼のゼミナールを妨害したので、ケーラーは責任者を叱責した。すると「責任者は縮み上がってしまい、こんなふうにするまう勇気のある教授がいるとはと、あっけにとられながら驚きと賛嘆の念を口にした」。激変した政治に関して、市民としての勇気を見せる者がいないことをムージルは嘆いたが、ここにはそれがあった。ムージルは1933年、「ゲッティンゲンの七教授」〔1837年、自由主義的な七人の教授が、ハノーファー王の憲法破棄に抗議して職を追われた〕の後継者がいないことを心底嘆いたが（P 1247）、ケーラーこそは、1837年の七教授と同じ役割を果たしたのである（KC 1124）。
- 24) 当然なことではあるが、ナチス台頭についてはヴァイマル共和国時代の政治、経済を抜きにしては語り得ない。たとえば外相ラーテナウの暗殺（1922年）、賠償金支払いの停滞を理由にしたフランス・ベルギー両軍によるルール占領（1923年）、マルクの価値が1億分の1に低下したハイパー・インフレ（1923年10月）など。本稿では立ち入らない。
- 25) Adorno, Theodor Wolfgang : Studien zum autoritären Charakter. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1995. S. 474.
- 26) コリーノによれば、1930年頃ゾーマ・モルゲンシュテルンがムージルとアドルノを引き合わせた。また1931年11月にムージルはフランクフルトで朗読会を行ない、ゲーテ・ハウスを案内されたが、アドルノの提案がきっかけだったという（KC 1781）。
- 27) より具体的なエピソードを記す。「にもかかわらず。ほくは朝に窓から下着姿の娘を見た。娘はほくを認めると姿を隠した。ほくはこれを見ても以前ほどの喜びを感じなかったのに気づいた。笑止なことにはほくの内部のずっと遠くの方で、ただの娘さんよ、おれは悲劇女優と付合っているんだぜ、というような声がするのを発見した。ぜんぜんほくじゃない。でもほくの内部に、こんな愚かしい思いがあったのは確かだ。」（T I 269）おそらく悲劇女優とはイダ・ローラント〔Ida Roland 1881-1951〕で、彼女はのちにクー

- デンホーフ＝カレルギー夫人となった (Bb 186)。
- 28) Hayasaka, Nanao : Verallgemeinerung der Persönlichkeitseigenschaften durch Robert Musils „Konstruktive Ironie“. Sonderdruck aus dem Protokoll der Sektion 27 des XII. Internationalen Germanistenkongresses Warschau 2010 (Warschau, August 2010) Fujiwara Verlag (Japan, Tokyo) 2013 参照。
- 29) 「症状としてのドイツ人」(1923年)。ここでムージルは人種と国民は結果にすぎないと記している。「いわゆる人種は、個々人の特徴から案出されたものにすぎない」(P 1064)。なお「国民とは、人びとがさまざまな版で国民という概念に与えた、想像の産物 (Einbildung) である」(P 1071) としている。
- 30) この会議に参加していたミハイル・コリツォーフ、ヴラジーミル・キルシオン、イヴァン・ミキーチェンコはその後スターリンの大規模な粛清によって殺害された。大会最終日の6月25日、作家マグドレーヌ・パズは、ヴィクトル・セルジュ擁護の論陣を張った。トロツキーを支持した廉でセルジュはソ連によりカザフスタン近郊に追放されたのだ。この「爆弾」により大会は紛糾した。初日に「自然に」湧き起こった「インターナショナル」にムージルが唱和しなかったのは当然であるが、彼の講演はその後ナチスからも左翼からも批判されることになる (KC 1194ff)。
- 31) ムージルは1930年7月、ソヴィエトの雑誌『新世界』(Nowy mir) に対して次のように述べている。1917年のロシア革命は、「人間が少なくとも何らかの点においてまだ善たりうる、と願っているわれわれにとって(…)大きな精神的支えです。あなたがたの学校へ行き、あなたがたの新たな世界観を学ばなければならない、とわたしは感じています。この新たな世界観はますます発展していきたくらうと思います」(B 472)。
- 32) Silone, Ignazio : Begegnungen mit Musil. (RMSZW 350) ムージルと政治については当然ながら一書を要する。本稿ではこれ以上立ち入らない。
- 33) イニャッツィオ・シローネのなぜウィーンを離れたのかという問いに、「わたしがこうして亡命者であるのは、彼 [エーフラ임・フリッシュ] や彼のような者たちが原因なのです」と話した。「その理由はとても単純です [...] わたしの読者と批評家が、ほとんど例外なくユダヤ人だったからです。ここ数年のうち彼らは順々にみな立ち去りました。わたし一人でとどまるべきだったというのでしょうか、いったいなんのために？」(RMSZW 350) あるいはストックホルムに脱出したツカカンドゥルは「もしあなたがウィーンの街で市井に紛れて暮らし、過去のすべてを捨てることを誓い、未来をその担保に差し出していたなら、おそらく発禁処分になることはなかっ

- たでしょう」(B 873)とムージルに書き送った。
- 34) この講演が間接的に、ヴァーグナーに心酔するヒトラーへの批判であるとみて、抗議文を草したのはクナッパーツブッシュであったが、その背後にはヒムラーの配下ハイドリヒ、さらに『フォルキシャー・ベオーバハター』主監ローゼンベルクがいるとする説がある。
 - 35) ジェームズ・テラー、ウォーレン・ショー(著)、吉田八岑(監訳)『ナチス第三帝国事典』三交社、1993年、250頁。他にはアインシュタイン、フロイト、ブルースト、H. G. ウェルズ等。
 - 36) とはいえムージルは欧州から脱出する計画をいくつかもってはいた。ルクセンブルク経由で他国へ行く計画は1938年7月にトーマス・マン、マイリッシュ夫人などが策定したが、ムージル一人を受入れるのが精一杯でマルタを同伴できないため、ムージルが断った。1938年12月にはイギリスおよびフランスへの移住を申請したが、4年間の待機期間があった(KC 1328)。アメリカにも移住を申請したが、その待機期間については不明である。上海へのヴィザは取得していた。当時は「貧乏人の亡命地」だったらしい。周知のように、ムージルが上海に向けて発つことはなかった。
 - 37) 周知のように、ユダヤ人のパスポートに「J」のスタンプを押すことをドイツに提案したのは、増大するユダヤ人移住者にたまりかねたスイスであった(1938年9月発効)。
 - 38) ミュンヘンのArcisstraße 12にあったPalais Pringsheimは1935年にナチスに徴発されて取り壊され、跡地に総統館(Führerbau)が建てられた。
 - 39) コリーノの伝記(KC)をデジタル検索する限り、スイス亡命時代にマルタの家系が暴かれたという記述はない。筆者が2012年にジュネーヴで入手した、フランス語のムージル関係の書類のなかには、「彼女はユダヤ人だ」という手書きの書き込みのある文書がある。
 - 40) 『ナチス第三帝国事典』200頁。なお水晶の夜において殺人に関与した者は一応逮捕されたが、ほとんどは訴訟が打ち切られるか無罪判決に終わった。しかしユダヤ人女性を強姦した者は「ニュルンベルク血統保護法」の「人種汚辱罪」(Rassenschande)で処罰されたという説がある。
 - 41) LWW 254。ひと目で分かる矛盾である。12日の爆弾は、20日に明け渡した家財道具に損害を与えることはできない。可能な解釈としては、ウィーン市からの「強制的指示」が20日付で明け渡せというもので、ムージルはそれに対してスイスへの転出届けを出した(KC 1938)。実際の立ち退き作業はそれ以前に行なわれていた、というものである。
 - 42) Hayasaka, Nanao: „Robert Musil und der genius loci“ – Nachträge (2)– In :

Journal of The Institute of Cultural Science No. 76, Chuo University, Tokyo
Okt. 2013, S. 294 参照。筆者は2000年頃、ジュネーヴ警察に死亡診断書を請求し、要求された費用を送金したが診断書は送付されなかった。筆者はスイス大統領に苦情を訴え、大統領は調査を約束したが、まもなく交代した。筆者は2006年にジュネーヴの戸籍役所 (État Civil) に死亡診断書を請求し、必要とされた50ドルを送金し、さらに遺族であるローゼンタール氏の同意書も入手して送付した。受け取ったのは、ローベルト・ムージルの氏名と死亡日時の記された紙片であった。さらに筆者は2012年、すなわちムージル没後70年にジュネーヴの戸籍役所を訪問した。2006年に職員の Aline Bauquis 氏が、没後70年にはすべてのドキュメントが公開される、と言ったからである。協力者の Stefan Imhoof 氏とともにまず警察署で75SFの手数料を支払った。特別のはからいで15分間だけ、しかも筆者早坂だけが文書を閲覧できるという。(フランス語を母国語とする Imhoof 氏はドアの外で待機させられた。) しかも写真撮影は不可。筆者は開いて置いてある文書(手書きのフランス語)を手帳に必死で書き写した。15分経過後に、室外で Imhoof 氏が読み、「違う。これは死亡診断書ではない」と言った。そのあと Imhoof 氏が告げるところによると、この間法律が改正され、ムージルのドキュメントは没後100年、つまり2042年に閲覧可能となった、とのこと。若い研究者は、ぜひ医師 Dr. Aron Starobinski の手になる死亡診断書を確認されたい。

- 43) 初演はベルリンのアポロ劇場で1899年である。台本の Heinz Boltens-Baeckers はケムニッツ生れなのでザクセン人というべきであろう。作曲の Paul Lincke はベルリン生れ。「ベルリンの空気」で有名。筆者が見たのはウィーン・フォルクスオーパー公演(2013年6月～)。この公演は、演出の Peter Lund により若干改変されている。Lund は Flensburg 生れなので旧プロイセン地域出身と言ってよいだろう。